
ルグスオンジュの陥落

由良ゆらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルグスオンジュの陥落

【Nコード】

N3666T

【作者名】

由良ゆらら

【あらすじ】

ルグス王国の第三王女フィオレンティナ。権力闘争に翻弄されながらも戦場を駆け、王にまでのぼり詰めた彼女の、一国を賭した恋物語。

初投稿です。不定期更新になります。

物語の性質上、痛い・殺傷シーンなどもございますので苦手な方はご遠慮ください。

細かな設定の矛盾点なども多々あるかと思いますが、それでもいいよというお心の広い方、大まかな雰囲気でも楽しんでいただければ幸いです。

ブローグ

もとより、器ではないのだ。

この首を差し出すことになんの躊躇いもない。

フィオレンティナはゆったりとした優雅な動作でそこに座した。

正装に不可欠なマントを尻に敷かないように浅く座れば、侍女が背後の蟠りを整える。長いドレスの裾も正面から刺繍が美しく見えるよう形を整えられた。

金系銀系で精緻な刺繍を施された白いドレスに身を包み、王の証である紫紺のマントを纏い、拳大のエメラルドを嵌め込んだ冠を戴く彼女が座したのは、大広間の最奥に鎮座する磨き込まれた金とりどりの宝石に彩られた玉座。左右の腕休めには広間に向かって威嚇するように牙をむく黄金の獅子が彫り込まれ、その瞳は赤い。座った時に黄金の光を背負って見えるように計算された背面の彫刻。座面と背もたれには極上の深紅のビロードがあしらわれている。

まったく、趣味の悪い。

このような成金趣味の玉座など、下品極まりない。金に物謂わせた威厳。

富と権力に尻尾を振る者ならばあるいは揉み手をしつつ平伏するかもしれないが。フィオレンティナにとっては嫌悪でしかない。

だがしかし、愚かな自分には似合いの場所かもしれないな、と自嘲する。

もうすぐ、あの男がやってくるだろう。

本物の、真の王たりえるあの男が。

この国を滅ぼし、この国の民を救う英雄が。

この国の王を討つために。

彼女を、殺すために。

婚約

フィオレンティナは幼い頃から好奇心旺盛で闊達な王女だった。ルグス王家の末姫として生まれた彼女は、歳の離れた二人の姉と、一年も違わない二人の兄がいる。当然ながら兄弟の中で王位継承権も最後尾であり、権力闘争から遠い位置にいたため、比較的自由な環境で伸びやかに育った。

当時の王はフィオレンティナの祖父ガウリド・エルス・アーク・ルグスで、厳しくも優しい人だった。若かりし頃に戦乱を勝ち抜いて国を守り、その後も安定した政で国を導く堅王と名高い祖父に、フィオレンティナは特に可愛がられ、祖父の膝に乗っては様々な話を聞かせてもらった。

それが冒険譚だったり英雄譚だったりするものだから、フィオレンティナが騎士団に混じって剣を振り始めたのも自然の成り行きと言えよう。

王女が剣を持つなどともないと思える者も多かったが、堅王が呵々と笑って許すので、表立って異を唱える者はいなかった。祖父の話は時に政治向きの話や戦の采配などに及び、難しい話もあったが、どれも興味深く、尊敬する大好きな祖父の言葉を聞きもらすまいと、フィオレンティナはひたむきに耳を傾けるのだった。

十歳の時、友好国であるロウディーク王国王太子の第一王子と婚約した。祖父が決めた縁談だった。

「フィオナ、あれは器の大きな良き王になるぞ」

おじい様がおっしゃるならそうなるだろうとフィオレンティナは思った。

外遊先から縁談話を引っ提げて帰ってきた祖父は実に上機嫌だっ

た。よほど王太子のことが気に入ったらしい。それとも仕事が上手くいったのか。きつと両方だろう。

当のフィオレンティナといえば、王女として、結婚はいつか当然すると思っていたし、政略的に嫁いだ二人の姉を見ているから自分の役割もきちんと理解している。ただ、今は剣を振り回し馬に乗る方が楽しく、将来の自分の行き先が決まったんだな、位にしか思わなかった。

「その方はわたくしが剣の稽古を続けても気分を悪くならないうでしようか？」

だから心配事と言えばそれくらいだった。歳の近い二人の兄はフィオレンティナが武を学ぶのを疎み、女のくせにと嘲るのだ。婚約者も兄達と同じなら、つまらない結婚生活になるかも知れない。

「はっはっは！ そんなことか！ 容姿は気にならぬのか？」

「そんなことじゃありません、大事なことです！ 見目は大きな問題ではありません。わたくしが気に入らずともこの話は進むのでございましょう？」

「うむ。友誼を深める意味合いもあるゆえ。よくて相手が第二王子に代わる位か」

「ならば意味ありません。見るに堪えない不細工なら泣くかもしれません」

祖父が気に入るのだから素養は問題ないだろう。

二番目の姉は国中の女性の憧憬を一身に集めていたという公爵の元へ嫁いだものの、たいそう見目麗しく節操のない夫で、浮気とか誘惑とか隠し子とか嫌がらせとか、ドロドロした話題が尽きないらしい。整ってれば良いという問題ではない。

「わたくしにとって大事なのは、わたくしの自由をどこまで確保できるかです！」

「姫のささやかな我が侘など笑って許す男になりそうではあるが」
本人に訊いてみるとなあ、と祖父は呟く。

「そうですか。でしたら……」

フィオレンティナは少し考えるような仕草をしてから、祖父を見上げた。

「お願いがございます、おじい様」

「申してみよ」

「わたくしに目と耳をくださいませ」

額面通りならばなんと物騒な願いである。たかだか十歳の王女が欲しがるものではない。

もつとも額面通りでなくても物騒なのは変わらない。彼女が求めたのは己の駒として使える密偵なのだから。

「わたくし、自由を守るために婚約者殿と交渉いたします！ 交渉ごとには情報が必要ですよ。それにあちらの事情を知っておいて損はないでしょう？」

王太子妃になるということは、ゆくゆくはロウデーク王国の王妃となることなのだが、それをわかっているのかいないのか、意気揚々と拳を握るフィオレンティナ。

婚約祝に頂戴してもいいでしょう？ とまるでドレスや人形をねだるように無邪気に微笑む孫姫に、祖父は目尻の皺を増やして鷹揚に頷いた。

「よかるう」

「嬉しい！ ありがとうございます！ おじい様！」

「ただし。今後淑女の講義も真面目に受けることが条件だ。エリアスが嘆いておったぞ」

「……はい」

喜びに任せて祖父の首に飛び付いたフィオレンティナだったが、交換条件とお小言に腕を解いて決まり悪そうにうつ向いた。

祖父の居ぬ間に退屈な講義から逃げ回っていたことは教育係のエリアス経由で筒抜けだったらしい。エリアスめ。

不本意ながらも唇を尖らせて同意するその様は、やはり十歳の子供なのだと、祖父の目尻の皺をさらに増やさせたのだった。

ルグス城の東の一角は軍施設となっている。普段、五面ある屋外鍛錬場は十三の騎士団が交代、あるいは合同で使用するになっているが、今は中央の一面を取り囲むように騎士達が集まり歓声を上げていた。

その中にあきらかに場違いな子供の姿が見える。ドレスではなく、動きやすいシャツとズボンに身を包み、長い髪をひとつに結んだフィオレンティナである。まるで少年のような恰好をした彼女は、屈強な騎士達と並んで、最前列で「いけ！」だの、「そこだ！」だのと拳を握って叫んでいる。

視線の先では第一団の団長と第三団の副団長による模擬戦が行われていた。第一団の団長は四十代の髭が似合う熟年剣士、第三団の副団長は最近抜擢されたばかりの二十そこそこの槍術士。

フィオレンティナはどちらも応援しながら、第一団長が勝つと確信していた。

最初は互角に打ち合っていた。しかし若い方が得物が長い分間合いは有利に見えるも、なかなか有効打を打つことができず苦戦している。次第に当たらない攻撃に苛立ってきたのか、若い槍術士の動きに荒々しさが見えはじめ、大振りになって隙を作ったところへ熟年剣士が素早く踏み込み、相手の喉元へ切っ先を突きつけて試合は終了した。

終わってみれば第一団長の圧勝であった。

礼を交わすふたりの騎士に拍手を送りながらフィオレンティナは隣に立つ若い騎士に声をかけた。

「レン、あなたの父君はやっぱり強いね」

「もういい歳なんですけどねえ」

ふう、とため息混じりにレンフォート・シルバは答えた。フィオレンティナがレンと呼んだこの騎士は、叙勲を受けたばかりの新米騎士である。短く刈った焦茶の髪と、それより少し明るい茶色の瞳

に活発な印象を受ける。歳は十七歳、叙勲が得られる最年少の歳だ。そんな謂わば下っぱの彼と、なぜ王女であるフィオレンティナが並んでしかも親しく話してるかというところ、レンフォートが第一団長の息子だからだ。父親のゲオルグ・シルバはフィオレンティナの剣の師であり、レンフォートは兄弟子で稽古相手でもある。

「俺が倒すまで負けてもらっちゃ困りますけど」

「そろそろ勝てそう？」

「どうですかねー。あの副長よりはいい線行くと思いますが」

「ずいぶん弱気だね」

「実践経験の差つてのは大きいんですよ」

「ふうん」

そつというものか、とフィオレンティナは頷いた。

「ま、すぐに追いついて最強の称号はいただきます」

「五年以内ね」

「は？」

「じゃないとわたくし見られないから。五年あれば十分でしょう？」

フィオレンティナがにこりと笑えば、レンフォートは怪訝そうな顔をした。

「なぜ五年なんです？」

「聞いてないの？」

不思議に思い、首を傾げる。

ゲオルグは二十年前の大戦で数々の武勲を挙げ、最強の英雄と名高く、祖父の寵臣である。そのゲオルグ率いる第一騎士団は王族や国の要人の護衛を任務とし、近衛騎士団とも呼ばれている。重要な場面では必ずゲオルグが祖父の守護についており、今回の外遊にももちろん同行していた。婚約話を知らない訳がない。事実、模擬戦前の稽古の時に、この度はおめでとうございますと祝の言葉をもらっていた。

だから当然レンフォートにも話していると思っていた。兄弟子のレンフォートにフィオレンティナはなついていて、婚約話は隠すこ

とでもないからだ。

「結婚するの」

「誰が？」「わたくしが」

「へえ、姫様が……………て、ええええっ！？ 結婚ですか？ 姫様が！？」

レンフォートの素っ頓矯な大声に周りの騎士達の視線が一斉に集まった。レンフォートを含め皆一様に驚いた顔をしている。

フィオレンティナは頬を膨らませた。

「何よ。わたくしが結婚したら可らしいの？」

「いえ、だって姫様まだ十歳でしょう？ お相手は？」

「どこの幼女趣味だよ！ と失礼なことをのたまっている。」

「ロウディークの王太子殿よ。ふたつ歳上なんですって」

「ああ、だから五年後…………」

「そうだよなーまだ子供だもんなーああびつくりしたー。とブツブツ呟くレンフォート。周りの騎士達もどこかほっとした様子である。」

「しっかしあのクソ親父そんな大事なことを……………ってえー！」

いつの間にか側に来ていたゲオルグに片耳を引っ張られ、レンフォートの端正な顔が歪んだ。

「何すんだクソ親父！」

「黙れ愚息が。殿下の御耳に汚い言葉をお聞かせするな。それから団長と呼べ。フィオレンティナ殿下、愚息が大変失礼いたしました」

吠えるレンフォートを軽くないなしたゲオルグに頭を下げられ、フィオレンティナは苦笑する。

「かまわないですよ先生。それより見事な試合でした」

「恐縮です。久しぶりに良い運動になりました」

「あの副長はどうですか？」

視線をやれば、ゲオルグに負けた彼は鍛錬場の隅で待機しているフィオレンティナ付きの侍女へ話しかけていた。女好きのするタイプなのか、侍女ははにかんだ様子で応えている。

「クーガーですか？ 過剰な自信と野心さえ捨てさればまだ強くな

るでしょうな」

この時フィオレンティナは自分の侍女に気安く声をかけている男がなんとなく気にかかり尋ねたのだが、ゲオルグの言う『野心』の意味までは捉えきれていなかった。

引っ掛かりはしたものの、婚約の祝いを口々にする馴染みの騎士達に囲まれて、それはすぐに霧散した。

意味するところに気付くのは、数年後のこととなる。

初対面

姿絵なんてよくて三割増、悪くて十割増　つまり全くの別人よ！
　　がっかりするからあのようなのはあてにするものではないわ！
　　そう息まっていたのは西隣の国に嫁いだ一番目の姉だった。嫁ぐ前、優雅で気品溢るる姿絵を眺めてうつとりとしていた姉は、結婚と同時に夫を見た折り、実物とのあまりの違いに混乱し、貧血をおこして倒れたらしい。

例外もあるようですわ、お姉さま。

十一歳、初めて婚約者と対面を果たしたフィオレンティナの感想である。

婚約話と一緒に祖父が持ち帰った姿絵は、整った顔立ちの優雅に微笑む少年だった。歳は十二歳、フィオレンティナよりふたつ歳上で少し大人びて見えたが、絵の中の彼はただそれだけの印象だった。整ってはいるがいったいここから何割差し引けば本物と合致するのか、十割だったら嫌だなと姿絵を見ながら思ったものである。

それがどうしたことが。

あの絵を描いた画家は力量不足だったに違いない。三割減どころか実物の方が三割増である。

フィオレンティナの前に立つ十三歳の彼は、整った顔立ちでは姿絵そのままに、さらに大人びて、凜としていた。真っ直ぐきりりと上がった眉、整った鼻に形の良い唇。何より目を引くのは意志の強そうな黒い瞳、その眼力。手脚は長く、装飾の多い王族の衣装の上からでもわかるスラリと無駄のない軀つき。数年後には精悍な美丈夫へ成長するだろう。

今フィオレンティナはロウデイク王国の謁見室にいる。

ルグスの外交官が長つたらしい格式張った挨拶を述べた後、フィオレンティナを紹介する。

「フィオレンティナ・アレナウス・イル・ルグス王女殿下にございます」

ロウデイク国王が鷹揚に頷いた。

中央の玉座にロウデイク国王、その隣に王妃が座し、二人を挟むようにフィオレンティナと近い年頃の少年がそれぞれ立っている。王妃の側にいるのはおそらく第二王子、王の側に立つのが第一王子だ。ふたりの王子は揃って黒髪黒目と父王の特徴を受け継いでいるようだが、視線が捉えるのはやはり第一王子である。

王家のほかには国の重鎮と貴族と思われる面々や警備の騎士などがいた。値踏みするような視線がいくつも絡み付く中、フィオレンティナは堂々としている。気持ちの良いものではないが気にはしない。ルグス王家と同盟国のロウデイク王家とは対等な立場である。臆することも遜る必要もないのだ。小さな背を真っ直ぐにピンと伸ばし、毅然と胸を張る。

両国の思惑はいろいろあるだろうが、フィオレンティナは留学という名目でこの国にやって来た。

一年前、ロウデイクの第一王子とフィオレンティナの婚約という形で同盟強化が図られたが、近頃近隣諸国との関係に緊張感が高まり、二十年前の戦乱以来燻っていた、不穏な気配が増していた。歴史深い小国のルグスは、北に海を抱き東西と南にあわせて四つの国と国境を接している。そのうち東と東南の国が怪しい動きを見せており、子供のフィオレンティナは詳しく教えてもらえなかったが、国境線で何度か小競り合いがあったらしい。西は既に嫁いでいた一番目の姉に任せるとして、最近横行している北の海賊や海の向こうの島国への警戒も怠れない。その上南のロウデイクとの同盟が揺らげばいかに堅固なルグスといえど損害は計り知れないだろう。更なる同盟強化のための自分は駒として送りこまれた、という

のがフィオレンティナの見解である。

平たく言えば人質。

何も聞かされないまま突然ロウディーク行きを指示され現在に至るので、思い当たる理由はそれぐらいしかない。

人質で結構。

国のため。それが王族の務めだ。

もともと政略結婚の相手国。ルグスを出るのが数年早まっただけのこと。

せいぜい価値の高い人質であると認めてみせましょう。

俯かず。前を見て。優雅に。微笑みさえ浮かべて。

負けん気の強いフィオレンティナは、まるで真剣の試合に挑むように闘志を漲らせていた。

「遠路はるばるよく参られた、フィオレンティナ王女」

ロウディーク国王が立ち上がってフィオレンティナに歩み寄り、

彼女の小さな手をとって口付け、貴婦人への挨拶をする。

柔和な笑みがフィオレンティナに向けられる。

だがどこにも隙がなく、近寄り難い圧迫感のようなものを感じた。得体の知れない何か。祖父とは違う圧迫感。これも王の威厳なのだろうか。圧倒的に経験の足りないフィオレンティナには、その違いをうまく説明することができない。

雰囲気吞まれないように、フィオレンティナもにつこりと膝を折る。一番品よく見えるドレスの摘み方、膝の角度、教育係のエアースに叩き込まれた優雅な所作を惜しみなく披露する。声も高くなりすぎないように。落ち着いて、ゆつくりと。口角は上げたまま、挨拶を述べる。

「お初にお目にかかりますロウディーク国王陛下、フィオレンティナ・アレナウス・イル・ルグスでございます。この度は御城へのお招き感謝致しますわ。留学の間一年間お世話になります」

「噂以上に愛らしい姫君だ。ロウディークは貴女を歓迎する。どうぞ我が家と思つて滞在して欲しい。一年と言わずずっと居てくれて

かまわぬよ」

こちらへ、と言ってロウディーク国王はフィオレンティナを家族の前に誘い、王妃、第一王子、第二王子の順に紹介していく。

フィオレンティナは相手の目を見てにつこり微笑みながらドレスの裾を摘んで腰を落とし、お目にかかれて光栄です、フィオレンティナでございます、どうぞよろしく、一言ずつ簡単に挨拶する。

相手の反応は三様であった。

王妃は座したまま鷹揚に頷くだけでにこりともしず。

王子たちは前に出て国王に倣いフィオレンティナの手をとって挨拶を返すものの、対照的な態度だった。

第一王子は好意的。

エンデュミオン・ジルキス・ロウディーク、それが彼の名だ。

間近で見るとなおのこと迫力のある美少年である。

エンデュミオンが目の前に立つと視線が自然とその黒い瞳に吸い寄せられた。人を惹き付ける、深い漆黒。

目が合えば漆黒の渦に呑み込まれていくような錯覚を覚えた。手を取られ、指先に唇を寄せられてる間も目をそらせない。

何故だろう、喉の奥に何かが詰まったように息がうまく出来ない。息苦しくて、鼓動が早くなった気がする。

長いようで短い視線の交差ののち、エンデュミオンの涼やかな目元がふつと緩んだ。

「よろしく。婚約者殿」

途端に温かく親しみやすい空気に包まれる。外見は父親に似ているのに、纏う雰囲気は全然違う。

先ほどの国王の笑顔が警戒心を呼び起こすものならば、エンデュミオンの笑顔はそれをほぐすものようだ。警戒心の強いフィオレンティナですら、初対面ですぐ気を許してしまいそうなほどに。

不思議な空気を持った人だと思った。

そんなエンデュミオンの後では、第二王子は霞んで見える。それを差し引いても第二王子のダニエルには眉をひそめなくなった。意

味ありげな粘つく視線を絡めてきてフィオレンティナを不快にさせたのだ。もちろん表情には出さずに心の中で舌を出す。

王妃と第二王子は極力接触回避、国王は要注意、エンデュミオンは要観察。この会見で王家の面々をそう位置づけた。

「姫も長旅で疲れてるであろう、今日はゆるりと休まれよ。三日後に歓迎の宴を開きたいのだが、いかがかな？」

「お心配り感謝いたしますロウデイク国王陛下。喜んで参加させていただきますわ」

宴については既に予定に組み込まれている。婚約の披露目という意味も兼ねているのだ。因みにふたりともまだ成人に達していないため正式な婚約式などはエンデュミオンの成人を待つて数年後に行う。

事前に外交官を通して調整済みの予定をわざわざ国王自身が訊いてくるのは、ロウデイク国として歓待の意を強調したいのだろう。国内外どちらに向けてかあるいは両方か。

台本通りの受け答えをもって短い謁見は終了した。

エンデュミオン

「姫。部屋までお送りしましょう」

退室するところエンデュミオンに声をかけられた。フィオレンティナは微笑んで彼の左腕にそつと右手を乗せる。見た目以上に筋肉質だった。普段から鍛えているのだろう。

謁見室の前室に控えていたルグスからの侍女サエラと護衛たち、加えてエンデュミオンの護衛も引き連れてフィオレンティナの滞在する西棟へゆつくり歩いていく。

大広間や食堂などの位置を簡単に教えてもらいながら、フィオレンティナはちらちらとエンデュミオンの横顔を盗み見た。背の高い彼はフィオレンティナより頭ひとつ半大きい。

先ほど目が合った時感じた息苦しさはなんだったんだろう。

今まで感じたことのない曖昧なもどかしさに、少し戸惑っていた。得体の知れない何かを植え付けられたような気がして落ち着かない。よほど不躰に見ていたんだろうか、視線に気付いたエンデュミオンと目が合った。

何を言われるかと身構えたが優しく微笑まれただけで、それがまた居た堪れない気持ちにさせられ慌てて目を逸らす。

耳のあたりが熱い。

なぜだかとても恥ずかしく感じて、早く部屋に着くようにと心の中で何度も唱えた。

ようやく部屋まで辿り着いてホツとしかけた時、去り際にエンデュミオンが言った。

「明日、昼食を一緒にしましょう」

フィオレンティナの都合を尋ねることはせず、正午に迎えに来ます、と言って去っていった。

不覚にも頷くことしかできないフィオレンティナであった。

エンデュミオンは思いのほかマメなようである。

翌日の朝一番に贈り物が届き、何かと思えば美しいドレスだった。フィオレンティナの海色の瞳に合わせたかのような青い清楚なドレスに、リボン、首飾り、靴まである。着てみればどうやって調べたのかサイズもぴったりだ。袖の長さをほんの少し調整すれば良いだけで、それもドレスと一緒に遣わされた針子があつという間に直してしまった。

「美しいですわ姫様」

侍女のサエラの賞賛も心からのもので、悪い気はしなかった。

「明後日の宴はこちらのドレスになさいますか」

「そうね」

そのために贈られたのだろつし、何より気に入った。

レース使いが美しく、幼すぎないデザインもいい。趣味は悪くないようだ。

正午も近くなり簡素だが礼を失しないドレスに着替えて迎えを待つ。

ノックがしてエンデュミオンかと思ったら、扉前の護衛が告げたのは第二王子ダニエルの来訪だった。

前触れも出さず突然おしかけるとは失礼な。

フィオレンティナは眉をしかめ、しかし追い返すわけにもいかず扉を開けさせた。

入室は許可しない。扉の前で応対する。

「ごきげんようダニエル様」

「やあティーナちゃん。中に入れてよ」

「フィオレンティナですわ。何かお約束してましたかしら？」

「あははっ、そんなかないこと言わずにさー」

軽い調子のダニエルに、貼り付けた笑顔が崩れそうになる。

いったい何をしに来たのかこの男は。ティーナちゃんてなんだ。初対面の印象通り不快な男だ。

「申し訳ありませんが、これから約束がありますので」

「あいつと？」

あいつとは？

「エンデュミオン様とのお約束です」

エンデュミオンの名が出た途端、にやついていたダニエルの表情にあからさまな侮蔑が生まれた。

感情を隠すつもりはないようだ。

「あんな奴つまらないよ。僕が遊んであげるから」

強引に手首を掴まれて、フィオレンティナはさて困ったと逡巡する。

事前に仕入れた情報では王位継承権を巡って確執があるらしい。

第一王子は聡明で優秀だが母親は下級貴族出の側室で、第二王子は王家傍流大公家出自の正妃腹だが短慮で暴力的。今のところ産まれ順により第一王子が王太子とされているが、王妃と一部貴族が難色を示している。第二王子こそが国を継ぐ正統な血筋であると。

第二王子が成人したらばどうなることか。一騒動は起きるだろう。確実に。

どこの王家も似たようなものだと思ってしまうが、その時第一王子がどう凌ぐのか見物ではある。

当然第一王子のエンデュミオンと婚約した自分も無関係でいられないと予想はしていた。

とは言えこんなに早く接触してくるのは予想外である。しかも遊んであげるなどと随分子ども扱いではないか。一般的に十一歳は十分子どもだろうがそれにしても甘く見られたものである。

これから長い付き合いになるかもしれないだし、この国で自分の立ち位置が確立するまでは子どもと侮ってくれた方が過ごしやすいだろう、さてどうあしらうべきが得策か。

フィオレンティナの迷いを都合良く解釈したのか、ダニエルは強引に部屋へ入ってこようとした。

「昼食はここに運ばせよう。今日は珍しい菓子もあるんだよ」
ルグスの王女が菓子で釣られるか。

エリ阿斯がいればこのような礼儀知らず誰であろうとフィオレンティナを煩わせることなく冷たく追い返してくれるのに。いつもは疎ましく思っていた教育係を懐かしかった。

「彼女は私と先約があるんだが」

救いの声は頼もしい教育係ではなく婚約者のものだった。

「ダニエル、女性に軽々しく触れるものではない」

「あんたに説教される覚えはない」

フィオレンティナを挟んで迎えに来たエンデュミオンとダニエルが睨み合う。

「ならばはつきり言おう。私の婚約者から手を離せ」

ただでさえ迫力のある美形が厳しい顔をすれば相手を怯ませるには十分なようである。ふたりの間に嫌悪な空気が漂っていたが、やがて劣勢を悟ったのかダニエルがフィオレンティナの手を離し、ちつと舌打ちだけ残して去っていった。

「弟がご迷惑をかけたようですね。申し訳ありません」

一転してフィオレンティナに向ける視線は優しくなった。

一晩たって落ち着いたと思っていたあの不可解な動揺が、またフィオレンティナを支配しようとする。抗って努めて冷静に答えた。

「いいえ、何もありませんでしたから」

「よかった。では参りましょう」

エンデュミオンにはダニエルの行動や態度について何か言うつもりはないらしい。ならばこちらも詮索はしない。代わりに侍女のサエラに視線を送ると、優秀な侍女はそれだけでフィオレンティナの望みを察したかのごとく小さく頷いた。

それから十日経つが、エンデュミオンは何かとフィオレンティナを誘い出し、できるだけ多く時間を共有しようとしているようである。

それがフィオレンティナを守るうとしての行動だと気付いて、彼女は嬉しく感じていた。

この国でフィオレンティナは後ろだてを持たない。守ってくれる祖父も、信頼できるゲオルグもレンフォートもエリ阿斯もない。エンデュミオンが全面的にフィオレンティナを受け入れる姿勢を示したことで、周囲もフィオレンティナを軽んじることはできなくなった。仲の良さを見れば反対勢力も彼女を取り込みにくくなる。

歓迎の宴でエンデュミオンは片時も離れずエスコートに徹し、立食式だったので甲斐甲斐しく給仕までして周囲の視線を集めていた。贈られたドレスを着たフィオレンティナを綺麗だと言って嬉しそうに眺め、そんな彼も白を基調にした衣装にタイや飾り紐などアクセントにドレスと同色の色使いを配した爽やかないで立ちで美貌に拍車をかけていた。まるで対の衣装を纏った初々しい婚約者たち。仲睦まじく、関係も良好。そう周囲の貴族たちに印象付けられたはずだ。

あのドレスはのための演出だったのだ。

初日に謁見の間から部屋まで送ってくれたのだった。周囲への牽制だったのだろう。

フィオレンティナを守ることで彼自身の立場も固めている。全てが自分のことを思つての行動ではないが、だから逆に信用もできる自分が裏切らなければ彼もまたフィオレンティナを守り通すのだろう。

今日は忙しいらしく昼は別々だったが、エンデュミオンは午後のお茶の時間に訪ねてきた。

手には香ばしい匂いを漂わせる籠を持っていた。リボンがかかって可愛らしく装飾されている。

「貴女にお土産です」

「ありがとうございます」

差し出されたそれを受け取って、かけ布をめくってみる。中には小さな深皿にこんもりと膨らんだ焼き菓子がいくつも入っていた。刻んだアーモンドや砂糖がトッピングされていて、齒ごたえの楽しそうなマフィンである。わざわざ籠で持ってくるとは、城の厨房で

焼かれたものではないのだろうか？

茶の支度が整い、土産のマフィンを口にする。フォークで掬って一口、二口。フィオレンティナの大きな青い目が更に大きく見開かれた。一口目はサクリと、アーモンドの香ばしい歯ごたえ。二口目はぷるりトロトロ、口の中で溶けていく魅惑の甘い果実。

「マンゴーのマフィンです。気に入られたようでよかった」

フィオレンティナの反応を観察していたエンデュミオンは満足気に微笑んで優雅に香茶のカップを口元に運んだ。

マンゴーはロウディークのさらに南の地方で収穫される果実である。北のルグスでは王族すら滅多にお目にかかれない珍品で、フィオレンティナの大好物である。

それがカップケーキの中に隠れていたなんて！

感動のあまり何も言葉にできなかった。ただ驚きと感動に満ちた目で向かいに座るエンデュミオンを凝視する。

「城下で人気の菓子店の期間限定商品です。貴女にぜひ食べてほしくて買ってきました」

「城下に視察に行かれたのですか？」

「まあ視察とも言いますが」

微妙にずれた回答に小首を傾げた。

エンデュミオンはいたずらっぽい笑顔で付け足す。

「遊びにだったらよく行きます」

「護衛を連れて？」

いつもエンデュミオンには三人の護衛がついているのだ、城下に下りるならその三倍以上の護衛が必要だろう。ごつい兵士をゾロゾロ引き連れて、いったいどう遊ぶのか想像できない。

「たいていは友人とふたりで城を抜け出します。時々ひとりで行くこともありますね。今日は所用があつてひとりで出てました。変装して名を偽れば意外とわからないものですよ」

事も無げに言われたが、フィオレンティナには衝撃的な事実だった。

なんてことだろう、王族が共も付けずに城下へ下りるなんて！

ルグスでは考えられないことだ。王族が城下を訪れる時は、まず訪問先を決め、道順を緊急用も含めていくつか選定し、事前に安全調査を行って予め警備兵を配置し、当日は緻密な警備計画のもと大勢の近衛騎士に守られながら行動するのである。

それが抜け出す！ しかもひとりで！

いいのだろうか、そんな情報を婚約者とは言え他国の者に軽々しく話してしまつて。信用されているならば嬉しいが、侍女たちだつているのに。

賢そうに見えるのは気のせい？ 買い被り？

誘拐や暗殺を考えないのだろうか。無謀だとか浅慮だとか自覚が足りないとか、同じ王族として感じることはある。しかし、祖父が認めたのだから、それだけではないのだろうか。祖父の目は確かだから。

『見極めてこい』

ルグスを発つ前の祖父の言葉を思い出した。

旅立つ孫姫を案じる言葉は何もなく、ただ一言。

見極めてこい。

何を、とは言われなかった。どうやって、とも示してくれなかった。

祖父はいつもフィオレンティナ自身に考えさせる。十一歳の少女にはいささか厳しい課題に思える。

けれども楽しいと感じる。今回の課題はやりがいがありそうだ。フィオレンティナはエन्दュミオンに興味を持った。そして、エन्दュミオン・ジルキス・ロウデイクという人物を知ることが楽しみだと思う。もっと知りたいと心がざわめく。

おそらくは祖父の目論見通り。でもそれも悪くない。

「……ふふっ」

つつい笑いもれる。

「エンデュミオン様は自由な方でいらっしゃるのね」

「息抜きは必要でしょう」

当然とばかりに言い切るエンデュミオンに、フィオレンティナはなおもクスクス笑いながらそうですね、と相槌を返す。

その意見にはおおいに賛成だ。根を詰めてばかりでは能率は悪くなる。たまったストレスを適度に発散させなければ思考は柔軟に働かないものだ。フィオレンティナにとっての息抜きはもちろん剣の稽古である。

「今度、一緒に行きましょう」

「え？」

「街を散策するのも楽しいですよ。私が案内します」

笑顔で誘われてフィオレンティナの心は揺らいだ。確かに楽しそうだ。ルガスでは絶対にできないことだ。フィオレンティナの好奇心がうずうずと疼き出す。でも……と迷う彼女に、エンデュミオンの押しの一手は魅力的だった。

「焼きたてのマフィンのもっと美味しいですよ」

「……行きます!!」

ルガスの王女は菓子には釣られない……が、焼きたてのマンゴーマフィンの誘惑には弱かった。

恋、なのか

侍女のサエラはナジュの民である。

ナジュの民とは、ルグスとロウディークを隔てるナジュ山脈のどこかに里を持つと言われている氏族のことである。成人しているものはみな、身体はどこかに蜜蜂の刺青を施しているため、「蜂飼い」とも呼ばれている。身体能力が高く、独自の情報網を持ち諜報活動に優れているというが、里がどこにあるのか規模は如何ほかその実態は誰も知らず謎が多い。そのためナジュの民の存在はお伽話のように不確かで、一般には実在を信じられていない。一部権力者と裏社会でまことしやかに囁かれるのみであった。

フィオレンティナもサエラを知るまではナジュの民について半信半疑であった。

しかしエンデュミオンとの縁談が決まり、強請った「耳と目」に祖父ガウリードから与えられたのがサエラである。フィオレンティナは驚きと感動に喜声をあげて祖父にとびついたのだった。

サエラの正体を誰にも明かさないこと、ナジュについて一切詮索しないこと、それがナジュの民との契約の条件である。もし守られなかった場合、サエラは姿を消すだろう。フィオレンティナは約束を死守すると固く誓った。レンフォートにすら話していない。

サエラが侍女として側にいるのは、「蜂飼い」の連絡係だからである。フィオレンティナにはどうやって仲間と連絡を取りあっているのかさっぱりわからないが、サエラを通して指示を出し、サエラを通して報告があがってくる。どのように情報を仕入れ何人の「蜂飼い」が動いているのかも謎である。「蜂飼い」というよりは蜜蜂そのものではないかと思う。女王蜂のために花の蜜を集め巣に持ち帰るように、契約主のために情報という蜜を集めてくるのだから。

フィオレンティナがサエラに依頼したのはロウディーク王家の動向調査である。

それにより第一王子派と第二王子派との確執、其々の派閥の主軸については把握している。今のところ勢力図は拮抗していて大きな動きはない。しかしルグスの王女フィオレンティナという石が投げられたことによりさざ波が起きているようだ。ルグス王家の血筋はさぞ魅力的なことだろう。

第二王子派はダニエル本人が接触を試みているようだが成功していない。代わりにフィオレンティナもほぼ軟禁状態にあった。エンデュミオンがいれば何かと外に連れ出してくれるが、いない時はエンデュミオンと親しい友人だという侯爵家の息子が話し相手に訪れたり、それ以外はエンデュミオンに忠実な護衛がフィオレンティナの部屋の扉を守り訪問者を通さない。逆にフィオレンティナが外に出ることも叶わなかった。

忘れそうになるがフィオレンティナは表向き留学という名目でロウディークに來ている。本来なら王宮群の一画にあるという学校に通っているはずなのだが、それもエンデュミオンによって先延ばされているようだ。

ここまでフィオレンティナを囲い込まなければならぬ状況なのだろうか。

もしかして何もできない守られるだけの姫だと思われている？

可能性はある。瞳の大きなどちらかといえば幼い顔立ちは叩き込まれた淑女教育の淑やかさとあいまって庇護欲をそそる……らしい、レンフォートによれば。ただし、黙っていればという条件付きで。

エンデュミオンがその辺を見誤ることはないと思いたいが。

ロウディークに來てもうすぐ一月を迎えるころである。

そろそろ大人しくしているのにも飽きてきた。

「姫様、王妃が医師に眠り薬を調合させたそうです。馬に効くほど強力なものだとか」

窓辺に肘をつき、溜まった苛々を持て余しながら外を眺めていた

ら、茶の湯をもらいに出て戻ってきたサエラが告げた。

ダニエルが最初に来てからその周辺の動向に注意するよう指示していたが、ここにきてようやく動き出したらしい。おおかた成果の出ないダニエルに業を煮やしたか。

「そう。ふふつ、近々お茶会の誘いがあるかもしれないわね」

「ドレスを新調なさいますか？」

「リボンのたくさん付いたピンクと白のドレスがあつたでしょ、あれでいいわ、子どもっぽくて」

「かしこまりました」

頷いてサエラが茶の準備にとりかかる。

さて、王妃はどう打ってくるのだらう。

「フィオナ姫！」

窓の外から名前を呼ばれてフィオレンティナは振り返った。

少し身を乗り出して覗き込めば、窓の下にエンデュミオンと、彼の友人のルカリオがいた。ルカリオは時々フィオレンティナの話し相手にやってくる侯爵家の子息である。

ここは三階なので彼らはめいっぱい上を見上げていた。

フィオレンティナの顔がほころぶ。

「エンデュミオン様！ ルカリオ殿も。なぜそんな場所に？」

そこは普段人が通らない場所だ。通るのは窓からの景観に配慮された小さな花壇を整える庭師と歩哨くらいだ。

「私の宮と鍛錬場の近道なのです。宮へ戻るつもりでした」

「姫の姿が見えたので、我慢できずに声かけちゃったみたいですよ」

「お前は余計なことを……！」

あははと笑うルカリオ、珍しく少し慌てた様子のエンデュミオン。見つけて声をかけてくれた。

フィオレンティナの頬がほんのりと赤く色付く。

「ちようどお茶を用意していたところです。よろしければ少し休まれて行かれませんか」

「せっかくですが汗をかいておりますし埃っぽいので、女性の部屋

を訪ねるわけには」

「まあ。そんなことちつとも気になりません！ お忙しいなら無理にとは申しませんが、早く来て下さらないとお茶が冷めてしまいますわ」

「貴女がご不快でないなら」

「私は遠慮します。馬に蹴られたくありませんから」

「馬……？」

意味がわからず首を傾げると、「すぐに行きます」とエンデュミオンがルカリオを引きずるようにして行ってしまった。犬がじゃれ合うように何やら騒ぎながら見えなくなった。

意外だわ。

エンデュミオンでも慌てたりするようなことがあるらしい。いつもフィオレンティナの前では紳士的で余裕があつて頼もしい感じなのに。

まだまだお互い猫を被っているようである。

エンデュミオンは言葉通りすぐにやって来た。

濃紺のシャツに白いズボン、先ほどルカリオも同じ格好をしていたので、騎士の訓練着かもしれない。何を着てもよく似合う人だ。

いつも一筋の乱れもなく整えられている黒髪は、今は自然に流れていて思わず触れてみたくなる。

「このような格好で申し訳ありません」

「いいえ、わたくしの方こそ無理にお誘いしてしまって。ご迷惑ではありませんでしたか」

ここ数日、とても忙しそうで少し疲れた様子だったから。一日一度はフィオレンティナに顔を見せにくるが、すぐに行ってしまう日が続いていた。

だから少しでも休んで行ってくれば、と思ったのだが。忙しい

なら迷惑だっただろうか。

エンデュミオンはとんでもない、と否定する。

「貴女から誘ってくださって、とても嬉しいです」

本当に嬉しそうに微笑むので、フィオレンティナにも笑みがこぼれる。しまりのない顔になっている自覚があった。

初対面から感じていた不可解な動揺は、今や甘い胸の高鳴りとしてフィオレンティナを支配する。

心地よく、甘い。

ようやくそれが何なのか思い至った。

恋、なのかしら？

そういう話に縁のなかったフィオレンティナには、はつきりと言いきることはできない。

恋がどんなものかなんて知らないから。

一生自分には関係ないものだと思っていた。

確かにエンデュミオンには興味を持った。でもそれは、ロウディークの王太子としてのエンデュミオンにだったはずだ。ルグスの政略結婚の相手として資質はどうか。そういう興味だと。

しかしそれだけでは説明のつかない感情は、恋と名付けるのが一番ふさわしい気がする。

たとえば彼の姿が見えない時にふと感じる寂しさ。

たとえば彼と目が合った時の胸の痺れ。

たとえば彼が嬉しそうに笑うだけでその何倍も嬉しいと感じる高揚感。

これが恋だとするならば、一目惚れという現象は本当にあるらしい。

思えば最初から、エンデュミオンに惹きつけられていたのだから。初めて会ったあの時、漆黒の瞳と目が合った時から。

「フィオナ姫」

名を呼ばただけで心が浮き立つなんて、これも恋だから？

「フィオナ姫」

今度は少し苦笑交じりに呼ばれて我にかえる。

「そんなに見つめられると、戻り難くなります」

困ったように言われて、フィオレンティナは赤面した。

自分はどれだけ見つめていたんだろう。エンデュミオンの香茶はすでに空だ。

慌てて淑女の仮面を取り戻そうとするが上手くいかない。

「もう行かなくては」

「そうですか」

もう？

喉から出かった言葉は無理やり飲み込んだ。

本当にひと息ついただけで行ってしまう。やることのないフィオレンティナと違って多忙な王太子なのだから仕方ないことだ。

「寂しい？」

「え、あの」

言い当てられては狼狽えるしかない。

エンデュミオンが優しく微笑む。

「そんな顔をされると自惚れてしまいそうです」

「どういう……」

「ほかの男に見せては駄目ですよ」

どんな顔をしていたというのか。自惚れるとはどういう意味か。訊きたいが、訊けない。

「もう少しで忙しいのも落ち着くはずですから。退屈でしょうけど、それまで大人しく待っていてくださいね。お茶ごちそうさまでした」
そう言っただけでエンデュミオンはフィオレンティナの指先に口付けを残し、自身の宮へ戻って行った。

王妃から招待がきたのは、早くも翌日のことだった。

昼食会

やられた、と思った。

王妃からの誘いは、予想外に早く、しかも絶対に断れない形でやってきた。

「久しぶりですね、フィオレンティナさん。休んでなくて大丈夫なのかしら？」

翌日、昼食前に王妃自ら乗り込んで来たのである。

エンデュミオンの指示を受けている護衛達も、さすがに王妃を追い返すわけにはいかない。しかもエンデュミオンは王太子としての視察業務で城を離れている。

最初の謁見でも歓迎の宴でも目を合わせようとしなかった王妃が、部屋に入ってフィオレンティナを見るなり大げさに心配そうな素振りをしてみせた。

「貴女がほとんど部屋から出ず誰にも会いたがらないと聞いて、加減でも悪いのかと心配になってお見舞いに来たのよ」

「ご心配おかけして申し訳ございません」

「思ったより元気そうで良かったこと」

否定も肯定もせず、謝罪だけに留めておく。

下手なことを言えば医師を呼ばれるか、痛くもない腹を探られるのだろう。どのみち部屋から連れ出されるのだろうが。

王妃も追及するつもりはないのか、あっさり本題に触れた。

「ならば昼食と一緒にいかがかしら。ついてらっしゃいな」

フィオレンティナの答えを聞かずにさっさと部屋を出る。身支度を整えてから伺うと言うと、そのまま十分可愛らしいわ、と強引に連れ出された。

何の準備もできないまま連れて来られた王妃の部屋には、既に食事の準備が整っていて、見舞いなどとは口実で最初からこのつもり

だったとよくわかる。席は四席。同席者がいるらしい。

席に着くと見計らったように扉が叩かれ別の来客を告げた。現れたのは腹の丸い中年の男だ。右大臣だという。

「お見知りおきを、ルグスの王女殿下」

確か右大臣は王妃の実兄だ。第二王子派の筆頭である。

右大臣はフィオレンティナの左隣に座った。

王妃はその向かい、フィオレンティナの斜め左前に座る。

ここで疑問が生じる。

残りの一席は王妃の隣、フィオレンティナの正面に準備されていた。

席次でいえば、空席が一番、王妃が二番目、フィオレンティナが次、末席が右大臣となる。

この国で王妃より上座に座る人物といえば、ひとりしかない。

これは、どういう会食なのか。

フィオレンティナを招いて第二王子派の筆頭と国王が同席する意味は。

冷や汗が出る思いだった。

やや遅れて国王がやって来て、フィオレンティナの正面に座った。表面上は和やかな食事が始まる。

フィオレンティナにとって一番のくせ者は正面のロウディーク国王である。

初対面にも感じた威圧感に、食もあまり進まない。

ただでさえ王妃の用意したと言う眠り薬がどう使われるか気がかりなのに、厄介な人物が現れたものだ。

継承権争いにおいて、国王は中立なのだと思っていた。むしろ、エンデュミオンを立太子させた本人なのだから、そちら寄りだと。しかし、今この席にいるということは。

自分は、思った以上に複雑な立場にいるのではないだろうか。そして、エンデュミオンも。

大人達の、というよりロウデイク国王の掌中で踊らされているような気がしてならない。

「どうした、口に合わぬか」

いつの間にか手が止まっていたらしい。ロウデイク国王に言葉、失態を知る。

「いいえ、とても美味しいですわ。その、少し緊張してしまつて」

「私的な席だ、楽にするが良い」

「努力してみますわ」

「ははは、愛らしいことを言う」

ロウデイク国王が楽しげに笑った。

苦い思いが広がった。

言葉少ななフィオレンティナを囲んで、大人達は余裕の笑みで会話をしながら食事が進んで行く。

大人達の意趣を読み取るうと神経を張り詰めていたフィオレンティナは、すぐにでも席を立ちたい思いでいっぱいだった。

「そう言えば」

と、右大臣が言った。

「王女はあまり部屋からお出になつてないとか」

「ええ、慣れない環境で戸惑つてしまつて」

「左様でしたか。退屈だったのではございませんか？」

「そんなことはありません。エンデュミオン様が良くしてくださいましたから」

「これは仲睦まじいことですなあ！」

はっはっは！ と笑う右大臣に、王妃も「まあ微笑ましいこと」と目を細める。

「でも、せっかくだからもう少し外に出てみたらどう？ 私の庭にも遊びにいらつしゃいな。ルグスには咲かない美しい花もあるのよ」
「それはいい。それならダニエル王子にご案内していただいてはいかがです、お年も近いことですし」

「名案ね。どうかしらフィオレンティナさん」

芝居がかった右大臣と王妃のやり取りに少々うんざりしながらも、フィオレンティナも笑みを作る。

「ありがとうございます」

「決まりね。ダニエルは優しいから何も心配いらなくてよ。きっと仲良くなれるわ」

「そうですとも。そうだ、この後もダニエル王子とお話されてみてはいかがかな。ちょうど年の近い貴族の子らも集まっているそうですし」

今日の一番の目的はそれが。

「それがいいわ、陛下もそう思いませんか？」

「良いのではないか」

ロウディーク国王が頷いた。

結局ロウディーク国王はそれ以上に何か口添えするでもなく、その場は散会となった。

それしか言わなかった、しかしそれだけで十分だったと言える。

公私問わず、立場のある人間が発した言葉には意味がある。

それがわからないほどフィオレンティナはみた目通りの子どもではないし、愚かでもない。ルグスの王宮は子どもらしい子どもでいられるほど優しい場所ではなかった。

フィオレンティナは懸命に考えを巡らせた。

これからどうするべきか。

第一王子派と第二王子派の力関係はほぼ互角。国民に人気があるのは第一王子。しかし第二王子こそが国王の寵児と明らかになれば一気に台頭してくるのは間違いない。

このままではいけない。

このままではエンデュミオンの立場が危ない。

ロウディークに来る前ならば、婚約相手が第一王子だろうが第二王子だろうが大差なかった。

だがエンデュミオンを知って、恋というものを自覚し始めた今では、他の者など考えられない。エンデュミオンでなければ嫌だ。

それにフィオレンティナはルグスの王女だ。ルグスのための駒であることは厭わないが、ロウディークに駒として扱われるのは矜持が許さない。

元々継承権争いは静観を決め込む予定だったが、こつも情勢が変われば話は別だ。

このままエンデュミオンに守られるだけの生活では、今日のように隙を突かれて、徐々に第二王子派に外堀を固められてゆくだろう。ロウディークとはなんの繋がりもない子どもものフィオレンティナに出来ることなどたかが知れているが、子どもなりの立ち回り方というのもある、そろそろ大人しくしているのにも飽きた頃だし、早々にエンデュミオンに掛け合う必要があるようだ。

「久しぶり。ティーナちゃん」

思考を遮ったのはダニエル。

下女達が卓上を片付け終えるより早く、上機嫌で王妃の間へやって来た。

ゆつくり考えたいのに。

この後はダニエルと過ごさなければならぬ。

なんとか早く切り上げたいものだ。

フィオレンティナは誰にも見えないように小さくため息をついた。

ダニエル

「伯父さんがティーナちゃんに友達を見せてあげてって言うから、見せてあげるよ」

ダニエルに手首を掴まれてフィオレンティナは引きずられるようにして行く。ぐいぐい引つ張られて掴まれた手首が痛い位だ。こちらを気遣う様子など欠片もなく、自己中心的なダニエルの性質が垣間見える。

向かった先は遊戯室。

ボードゲームやカードゲーム、室内球技用の設備などが整っていて、楽器まである。隅のテーブルには数種類の菓子やジュースが用意されていて、好きな時に好きな物をつまめるようになっていた。

そこには十人ほどの貴族の子ども達がいた。十二歳のダニエルと年の近そうな、十代前半の子らで、女の子も数人いる。

ゲームに興じたり談笑したり思い思いにすごしていた彼らは、ダニエルとフィオレンティナが入ると一瞬にして静まった。緊張と興味をはらんだ視線と沈黙。ダニエルが上機嫌のまま片手をヒラヒラ振ると、それが気にするなという合図だったのか、あからさまにホッとした様子でゲームや会話が再開される。

長椅子に深く腰掛け脚を組んだダニエルの横に座るよう言われ、表面上はにこやかながらも少し距離をおいて腰をおろしたのは、フィオレンティナの隠し切れない心情の表れだ。

そのまましばらく観察していると、子ども達はダニエルから声がかからない限り自ら近寄って来ることはないとわかった。中には怯えの色も見えて少し気の毒にすら思う。だがそこにつけ入る隙があるというもの。ダニエルは言葉通り「見せる」だけのつもりらしく、紹介もないのでフィオレンティナは自分から動くことにした。右大臣の意図に沿う形だが、逆手に取る事だつてできるのだ。ダニエルに怯える集団の中に、ルグスの王宮で鍛えられた自分と渡り合える

者などいないと確信していた。

「つまらないわ、ダニエル様」

わざと大きく溜め息をつけば、ダニエルがフィオレンティナを覗き込む。

「ティーナちゃん？」

「ちつとも楽しくありませんと申し上げたの」

ダニエルの眉が不快気に寄せられ、棘を含んだその視線は彼の目の前でコインマジックを披露していた男の子に向けられた。青褪める男の子をしかめっ面で立ち上がったダニエルが足を払って転がし、蹲ったそのわき腹を蹴る。控えていたダニエルの従僕が、どこから出したのか乗馬用の長鞭を主に手渡した。用意のいいことだ。

勢い良く振り上げられた鞭を持つ手にフィオレンティナはそつと手を添えることで止める。

「その方は悪くありませんわ。わたくし座ってるだけで飽きてしまったの。ダニエル様、一緒に遊びましょう？」

「……ティーナちゃんがそう言うなら」

ダニエルは昂ぶって持て余した怒りを、足下の男の子をもう一度蹴り飛ばすことで収めたようだ。なるほど短慮で暴力的、報告そのままだ。

「カードゲームはどうかしら。ルグスでカードゲームと言えばククル力なのですけど、ダニエル様はご存知？」

「知ってるよ」

「じゃあククル力にしましょう、皆でできるし」

「こいつらも一緒に？ ティーナちゃんはルグスの王女様なんだから僕と仲良くしてれば良いんだよ」

「どういう理屈なんだか。」

「あらだつて、ダニエル様のお友達なのでしょう？ でしたらわたくしも仲良くしたいわ。それに人数が多い方がきつと楽しいわ」

「んゝ、わかった。いいよ」

「嬉しいですね、ダニエル様。……あなた、立てる？」

蹲ったままの男の子に、屈んで手を差し出す。ダニエルには聞こえないように「ごめんなさいね」と小声で伝えた。男の子は驚きに顔を上げ、フィオレンティナの手を掴まずバネのように飛び起きて「畏れ多いことです……っ」と真つ赤な顔で言った。
「ではダニエル様、ここにいらっしゃる皆さんにわたくしを紹介してください？」

かくしてフィオレンティナは第二王子派の貴族の子らと繋がるきっかけを得、フィオレンティナがいればダニエルの理不尽な暴力から逃れられるかもしれないという淡い希望を植え付けた。ダニエルの許しが出れば積極的に話しかけてくる者もいて、着々と情報を得る。あとで彼らの実家の情勢をサエラに調べさせよう、そんなことを考えながら手際良くカードを切り、ダニエルを勝たせるように仕向けるのも忘れない。

一通り全員と話ができ、ゲームに勝ったダニエルがご満悦なところでそろそろ中座を告げようかという頃、フィオレンティナは体調に異変を感じた。

身体が重く、ひどく眠い。

すぐに思い至った。

先ほど口にしたジュースのグラスに目をやる。

王妃の眠り薬。いつの間に混入させられていたのだろう。

重りをつけたようにまぶたが下がっていき、自力で開けられそうにない。

「あれえティーナちゃん眠くなっちゃった？ 疲れたのかな？」

眠りの世界に引きずられて行く中、ダニエルの楽しそうな声が聞こえた。

目が覚めたのは暗い部屋の中、柔らかな寝台の上だった。サイドテーブルのランプだけが控えめな灯りを灯している。
起き上がり、ぼんやりとかかった霞を振り払うように頭を振る。

「おはようティーナちゃん。よく寝てたね」

すぐ側で声が聞こえて、ギョツとして見れば、寝台に寝そべって片肘を立てて頬杖をつき、薄暗闇の中こちらを見ているダニエルがいた。

「ダニエル様……ここは？」

「僕の部屋。ティーナちゃん寝ちゃったから」

薬を盛ったくせに。

おかげで頭が重い。

「ご迷惑おかけしてしまいましたわね、申し訳ございません」

「うっん、寝顔可愛かったし」

「……ずっと見てらしたの？」

「だって可愛かったから。ああ、何にもしてないから心配しないで？　僕、ティーナちゃんのこと気に入ってるけど、まだ子供すぎるし。あと何年かして胸もお尻も成長したらちゃんと抱いてあげるから」

呆れた物言いにしばし呆然としてしまった。

抱くという意味が親愛の抱擁ではないことくらいフィオレンティナにもわかる。

どこまでも自分勝手に失礼なダニエルを、やはり好きにはなれないと強く思った。怒りを押し殺して聞かなかったことにしようと努める。

「すっかり長居してしまいました。すぐに失礼いたしますわ」

「しばらくここに居なよ。部屋に戻ったらあいつが邪魔でありますわ会えないでしょ？」

「でも」

「母様がティーナちゃんは僕の物になるんだから仲良くしなさいって、着替えもちゃんと用意してくれたから大丈夫だよ。部屋からは出してあげないけど、僕が側にいてあげるからね。寂しくないですよ。とりあえずお腹空いたでしょ、食事にしよう」

軟禁宣言である。

既成事実を作って婚約相手を替えてしまおうという手っ取り早い愚策である。

少しは思惑を隠すとか、そういうつもりはダニエルにはないらしい。

短慮で暴力的、そして単純。右大臣にとっては操りやすいことだろう。もしもこれが演技ならば手強い相手かもしれないが、これでは単なる馬鹿である。ロウディーク国王が第二王子派側につく意味がわからない。

「……まだ少しすっきりしなくて……もう少し眠っても？」
「お腹空いてないの？」

「ええ、まったく。ダニエル様だけでも召し上がってください」
「じゃあそうするよ。僕はお腹空いたし」

またあとでね、とダニエルが寝台を降り部屋を出て行く。

フィオレンティナは「ひとりで眠りたいから」と隅で控えていた侍女も部屋から追い出した。

部屋の中に誰もいなくなったのを確認して、窓を開ける。

縁から下を覗き込めば、四階位の高さだろうか、飛び降りるには高すぎる。

あまり考えている時間はない。

ダニエルと二人きりで過ごすなんて冗談ではない。

フィオレンティナはすぐに窓から抜け出すことを決断した。

ロープなどあるはずもないから、シーツやかけ布を手繰り寄せる。一角を結んでコブを作り、対角にもコブを作る。シーツ一枚、かけ布二枚に同じ様に施し、今度は一つのコブと別の布のコブを結び、繋ぎ合わせた。こうすると荷重が掛かってもコブ同士が滑り止めの役割を果たしほどこにくいのだ。

即席のロープ代わりをどこに括るか辺りを見回し、カーテンに目をつけた。

試しにカーテンにぶら下がって揺すってみたら、フィオレンティナの重さに耐えてくれそうだった。

フィオレンティナは一つ頷いてカーテンの裾にもコブを作り、即席ロープと結び合わせる。念のため引つ張て強度を確かめ、窓の下に巡回の兵士がいないことを確認して躊躇いなく外に垂らす。少し長さは足りないが、飛び降りれない高さではないだろう。

「よし」

大きく息を吸って気持ちを整え、即席ロープを掴んで軽々と身を乗り出す。裾の膨らんだドレスなど物ともせず、フィオレンティナはロープを伝い降りて行った。

迷子

「お腹が空いた」

庭園に点在しているベンチに寝そべって夜空を見上げていたフィオレンティナは呑気に呟いた。星が綺麗だ。時刻はまるきりわからないが、夜が更けてからしばらくたっているだろう、深夜には達していないところか。

幸い羽織りが無くても良い位の過ごしやすい温度で、真冬じゃないが良かったと心底思う。ロウディークの冬は知らないが、ルグスなら確実に凍死する。

そろそろ城の方が騒がしくなってきた。

脱走がばれたようだ。

こんな時、レンフォートなら真つ先にフィオレンティナを探し当てるのだが。あいにく、レンフォートはここにいない。ルグスを発つ時、彼は任務で東の国境警備についていた。小競り合いが起きている、いわば前線である。軽口は叩くが根は真面目なレンフォートのことだ、師であり父であるゲオルグを超えるために最前線で無茶をしているのであれば良いが。

無事でいて欲しい、と祈る。兄弟子であり友人であり、血の繋がった家族よりもよほど家族だと思う、気のおけない存在なのだ、彼は。

エンデュミオンともそんな関係を築けるだろうか。

今までは猫を被ってきたが、これからはもう遠慮しないことに決めていた。しかし、淑やかとは言えない自分を、エンデュミオンは受け入れてくれるのだろうか。

女のくせに。はしたない。

兄達や貴族達の嘲笑を思い出す。

エンデュミオンにあんな目で見られたら

気に留めたこと

もない揶揄が今更になってフィオレンティナを落ち込ませた。胃の

あたりが上から押さえつけられたように重く感じる。

しかし、それこそ今更なことに気付く。

四階の窓から抜け出したことはいずれエンデュミオンの耳にも入るだろう。普通のか弱い姫君ならあんなことはしないものだ。

フィオレンティナは不安を振り払うように立ち上がり、次に移動する場所を探しに歩き出す。

もっと見つかりにくい場所に隠れよう、と篝火の灯りの届かない暗がりへ進む。そのまま夜を明かすつもりだ。皮肉なことに睡眠は十分とれている、朝まで眠らずとも平気だ。明るくなれば自力でも部屋に戻るだろう。

そう、フィオレンティナは迷子だった。

何しろこのひと月はほとんど部屋から出ることもなかったため、王宮の造りはまるで把握できていないのだ。かといって、適当な人間に道を尋ねたところでダニエル側の手の者だったら逆戻りになりかねない。

そんなわけで人目を避けて彷徨った結果、現在に至る。

巡回の兵士を底木の植木に隠れたりしながら何度かやり過ごし彷徨っている、整然と立ち並ぶ樹木を見つけた。

ふむ、これはいい。

フィオレンティナはいくつかの木の幹をポンポン叩きながら歩き、適当なところで幹に抱きつくように両腕を回すと、よいしょと登り始めた。暗闇の中、手と足で器用に瘤や枝を捉えていく。大人の男の二倍は優に越える高さで枝に腰掛け落ち着いた。

何度か通り過ぎた明らかに何かを探している様子の兵士や使用人は、フィオレンティナのすぐ下を通りながらも誰一人頭上に注意をはらう者はおらず、彼らを悠然と眺めながら、時折手近な小枝をパキパキと細かく折って退屈を凌ぎつつ朝を待つ。

やがて空が白み始め、暗青色から紫色、薄紫色を経て透明感のある白色を呈してきた夜明け前の東の空をぼんやりと眺めていた。

青紫のグラデーシオンに朱色が混じりそろそろ日の出かという頃、ふと呼ぶ声が聞こえた。

「フィオナ姫！ フィオナ
！」

どこか焦りを含んだその声が、誰のものかすぐにわかった。思わず枝の上に立ち上がる。

まだ薄暗いながらも全体が見渡せるようになった庭園に、三つの人影が見える。エンデュミオンと、護衛の兵士だ。なぜ彼が。

急な視察で城を離れていて、戻りは今日の午後だと聞いていた。ここに**いるはずはないのに**。けれど間違いなく彼だ。

「エन्दુミオン様……」

フィオレンティナは片手を胸に当てぎゅつと握りしめた。
なぜだか胸がいっぱいで泣きなくなった。

自分を捜す声が庭園に響く。

疲れているだろうにきつとわざわざ戻って来たのだ、フィオレンティナのために。

申し訳ない気持ちと、それ以上に湧き上がる嬉しい気持ち。

口元が緩んでくる。

泣きたいのに、笑いたい。

そして次に無性に叫びたい気分になった。

へんなの。

これもやはり恋ゆえなのか。

くすぐっ たくも甘く、切なく、様々な感情を呼び起こす。

フィオレンティナは大きく息を吸うと、溢れる感情を放出するよ
うに叫んだ。

「エन्दューミオン様——っ！！！」

声が届き、エンデュミオンが立ち止まったのが見えた。もう一度叫ぶ。

「エンデュミオン様！　こちらです！」

「フィオナ姫！？」

すぐに声が返ってくる。

だが姿が見えないのだろう、どこですかと問われたので、ここです木の上です、と木を揺すって知らせる。

「わたくしがそちらへ行きます！」

「駄目です！　危ないから動かないで！　いいね！？」

慌てたように言って駆け出すエンデュミオン。フィオレンティナは大人しく枝に座り直した。

「無事でしたか！」

「はい」

心配そうに見上げるエンデュミオンに木の上から満面の笑みで答えた。

ほっとした様子で続けて問われる。

「怪我は？」

「ありません」

「なぜそんなところに？」

「道に迷ってここで夜を明かしていました。今降りますね」

「一人では危険です。私が上に」

「大丈夫です」

しかし、と下で受け止める姿勢のエンデュミオンを大丈夫だからと宥めて少し下がってもらい、フィオレンティナは一番下の枝まで降り、そこにぶら下がってやや反動をつけて手を離し地面に着地した。

「ね、大丈夫でしょう？」

「貴女って人は……」

ため息交じりに言われ、不安を覚える。

「怒ってます？」

「いいえ」

「では、ご不快でしたか？」

眼差しには兄達のような侮蔑の色は見えないけれど、嫌われてしまっただろうか。

ほんの少しの沈黙が、不安を増幅させる。

知らず、体の前で重ねていた手に力がこもる。

上目遣いで緊張しながら返答を待った。

「何に不快になるのです？」

「はしたない、とか」

「思いませんよ。驚きましたが」

「……よかった」

力が抜けほつと笑顔になる。

しかし次の瞬間には驚きに染まった。

エンデュミオンがフィオレンティナの頭を抱えるように抱き寄せたからである。

「フィオナ姫」

優しく抱きしめられ、名を呼ばれ、フィオレンティナの鼓動は一気に高鳴った。

少し熱がこもったようなエンデュミオンの声が体に直接響いて全身に染み渡って行くようだ。

「エンデュミオン様……」

「心配しました」

「はい」

「貴女が危険な目にあっているのではないかと、気が気ではなかった」

「ごめんなさい」

「本当に無事で良かった」

本気でフィオレンティナの身を案じていたのだと伝わって来て、胸がいつぱいでまた泣きたくなる。

ああ、とフィオレンティナは唐突に理解した。

好き。

エンデュミオンが好きだ。

この人がたまらなく好きなのだ。

こみ上げてくる愛しい想いに突き動かされて、エンデュミオンの背に両手を回し、硬い胸板に頬をすり寄せる。それに応えるようにフィオレンティナを抱く腕に力が込められさらに胸を熱くした。

「いったい何があったんですか」

やがてエンデュミオンが腕をほどいた。離れていく温もりを寂しく思いながら、いつまでも甘い想いに浸っているわけにもいかないと理解しているフィオレンティナは気持ちを切り替えて顔を上げた。逆に彼はどこまで把握しているのだろうか。

「エンデュミオン様はどこまでご存知ですか？」

「貴女が倒れてダニエルが連れ去ったと連絡があり視察先から急いで戻ったら、貴女は行方不明だという。それでこうして捜していたので詳しいことは何も」

「そうですか。簡潔に言っていると、薬を盛られて軟禁されたので逃げただけです」

「な……」

笑みさえ浮かべてさりと事実を述べ、医者を叩き起こせと厳しい顔で護衛に言付けるエンデュミオンを安心させるため、ただの眠り薬ですから心配ないと付け加える。

それよりも、とフィオレンティナはエンデュミオンの頬に右手を伸ばした。疲れが滲んでいて顔色があまりよくない。

「一晩中捜してくださいましたね。来てくれて嬉しいです。凄く嬉しい。ありがとうございます。でもお疲れでしょう？ 少し休んでください。話しはそれからにしましょう。わたくしもお腹が空きました」

明るく笑うフィオレンティナに毒気を抜かれたのか薬を盛られたと聞いて殺気立ったエンデュミオンがふっと苦笑した。

「貴女に気を遣わせてしまったな」

そう言って頬に伸ばした手を握り、指先に口付けを落として、手を繋いだまま歩き出した。

フィオレンティナはほんのりと頬を染めた。

爽やかな朝の庭を手を繋いで歩く様はまるで早朝の散歩を楽しむ恋人同士に思えてくすぐったかった。

変化

好きだと自覚し、はつきり認めてしまえば、想いが募るのは早かった。

会う度好きになり、言葉を交わす毎に惹かれていく。

芽吹いたばかりの種は、エンデュミオンという光に照らされてぐんぐん伸び上がり、胸の内に力強い根を張って、葉を広げ、より多くの想いを育てて花を咲かせていく。

「かも」しれない不確かだった恋心は、確かなものとして根付き、いつの間にかエンデュミオンは無くてはならない大切な存在になっていった。

あの軟禁事件の後から、フィオレンティナを取り巻く環境は変化した。

まず、護衛付きではあるが部屋から出られるようになり、行動範囲が広がった。そして、留学という名目通り、学校へ通うようになった。

あの後。

フィオレンティナは怒られた。

しかも二人から。

サエラとエンデュミオンにだ。

エンデュミオンに部屋まで送ってもらい、すぐさま医者に診せられ、湯浴みと食事を済ませたらさすがに疲れて昼までぐっすり寝てしまった。エンデュミオンは医師の診断で問題ないことを確認すると、捜索隊の収束に向かい、その後少し休んで、話を聞くため午後にもまた来ると言い残して行った。

昼過ぎに目を覚まして待っていたのが侍女であり「蜂飼い」のサエラの説教だった。曰く、

「救出の準備を整えて忍び込みましたのに、姫様は御自分でお逃げになった後で行方わからず、どれだけお捜ししたことが。ああいう場合は、命や肉体の危険が差し迫ってない限り、待っていてください。必ず助けに参りますから。救出を待つのも姫君のお役目でございます」

涙目で訴えられては反論もできず、しおらしくごめんね、と言うしかなかった。ずいぶん心配させたようで素直に反省した。サエラは普段侍女に徹しているがナジュの民「蜂飼い」なのである、危険に対する対処法も心得ており、侍女として側に待るのは連絡役のほかに護衛の役目も担っているからだ。

「私、姫様に信頼されていなかったのですね」

そう言うわけではないのだけど。

とにかくダニエルから早く離れたかったのだと宥めたが、肩を落としていたサエラは、姫様に信頼していただけるよう頑張ります、と何やら決意を改めているようだった。

次に部屋を訪れたエンデュミオンには、四階の窓から脱出など無謀なことはするなと怒られた。怒ると言っても王妃との昼食会から救出まで時系列で説明し終えた後に、それまで口を挟まず聞いていたエンデュミオンに、静かに、けれど有無を言わさぬ強さをもって宥められたのだ。曰く、

「貴女は無茶をしすぎだ。たった一人で怪我でもしたらどうするんです。もっと自分を大事にするべきだ。助けが必要な時は私が必ず助けに行きます。だから二度とそんな危ない真似はしないこと。約束して。いいね？」

フィオレンティナの前ではいつもにこやかなエンデュミオンだが、この時ばかりは笑みもなく真剣な表情で、漆黒の双眸が否やを言わせない迫力を湛えていて、はいと肯くほかなかった。

それでも必ず助けに行くと言われて嬉しくなり、怒った時は瞳の黒が一層深くなるのだと、新らしく知ったことに嬉しくなり、ど

うしても頬が緩んでしまっ。

「わかってますか？」

「はい」

訝しげに問われにこにこと答えれば、本当にわかってるのかな、
とため息を吐かれた。

わかってる。

今になってみれば、あの時逃げたのは早計だった。とにかく話の
通じない自己中心的なダニエルから早く離れたくて、自力で逃げ出
すことしか頭になかった。味方がどう動くのかなんてまったく考え
なかったのだ。

結果としてサエラやエンデュミオンに余計な心配と手間をかけさ
せてしまった。

その点は反省しているのだ。

今度からは感情で動く前に味方の動きも勘案するべきだと学んだ。
どうしても必要な時は、極力安全な方法を考えよう。その考え自体
がずれているのだとは、フィオレンティナが気付くはずもない。

だからフィオレンティナが第二王子派に探りを入れると助力を申
し入れて、やはりわかってない、と深く嘆息されたのは当然と言え
よう。

「貴女は我が国の客人です。巻き込むわけにはいかない」

暗に首を突っ込むなどの返答はもつともであるが、こちらはもう
巻き込まれている。フィオレンティナはきっぱりと言い切った。

「わたくしはダニエル王子に利用されるなんてまっぴらです。考え
ただけで鳥肌が立つわ。これはわたくしの問題でもあります」

出来る事なら二度と関わりたくないのに、そういう訳にも行かな
いのが腹立たしく、思わず本音をこぼしてしまった。

ダニエルの失礼な言動を思い出すと眉間に皺が寄る。平手の一発
でも見舞ってくればよかった。いつか絶対、力一杯叩きのめしてや
ろう。

「わたくし自身のためにも自分で出来る事をしたいの。エンデュミ

オン様には迷惑かけません。むしろ、貴方の助けになると思うわ。
わたくしを信用して任せてくださらない？」

「まったく、気の強い姫君ですね」

「あら、それがわたくしだもの」

呆れ気味に言われてしまったが、嫌悪感は見取れない事に安心して、鮮やかに笑い返した。

型にはまった人形のような淑女の微笑みを脱ぎ捨てれば、自信に溢れた輝かしい笑顔がフィオレンティナを縁取る。

一瞬目を見開いてフィオレンティナを凝視したエンデュミオンは、何故か嬉しそうに笑った。

「ははっ、かなわないな」

「閉じ込められると抜け出すかもしれませんよ？」

駄目押しに冗談めかして言った言葉が功を奏したのかはわからないが、絶対に一人にはならないこと、深入りしないこと、少しでも危険を感じたらすぐに手を引くことなど、いくつも約束させられてフィオレンティナへの規制は緩められた。基本的に王国の来賓が入り出来る場所は好きに行けるようになり、学校にも通うことになった。部屋への来客対応の可否もフィオレンティナの判断に任される。

エンデュミオンによれば右大臣のようにフィオレンティナを取り込もうとする勢力とは逆に、排除を目論む輩もいるため、注意を怠らないようにと念を押された。フィオレンティナの知る限り、注視していた第二王子派ではない。となれば第一王子派中の一派か、派閥に属さない者が。過激な排斥論者は圧力をかけて抑えたので当面の間は危険はないが油断しないようにとのことだった。だから必要以上に隠されていたし、ここしばらくエンデュミオンは忙しかったのかと思に至る。

事の顛末の報告内容についても擦り合わせした。

眠り薬や軟禁については明るみにせず、ただ迷子になり不安のあまり気を失っていたということにする。気絶したことにしておけば

何かと言いつてもいい。事実を伏せたままではダニエルを直接咎められないとエンデュミオンが難色を示していたが、公にすれば国を介しての面倒事に発展しかねない内容だ、ルグス側には有利なカードとなるにしても、それで祖国が得る微細な益と今後の自分の立場を天秤に掛けて、判断した結果だ。

貴女が十一歳の姫君だと忘れそうになりますよ、とのエンデュミオンの言葉は褒め言葉として受け取っておいた。

一番嬉しい変化は、剣術の稽古ができるようになったことだろう。話し合いの中で、時々鍛錬場を使いたいと希望を言ったら、驚かれることもなくすんなりと許可が出た。しかもエンデュミオン直下の隊であれば、訓練に交じって良いとまで。

あまりにあっさり希望が通ったので、肩透かしをくらった気分で見つけた。

「知っていたんですか？」

フィオレンティナが剣を嗜むことを。

ドレスのサイズまで調べていたエンデュミオンである、知られてる可能性は高いと思っていた。

「ゲオルグ・シルバ殿と手合わせしたことがあってね、その時に。

フィオナ姫は優秀な生徒だと聞きましたよ」

先生か。一年前に祖父とロウディークを訪れた時にでも手合わせしたのだろう。ゲオルグの勇名は他国へも知れ渡っているらしいから。剣を持つ者ならば一度は試合してみたい相手だ。

「フィオナ姫とも是非手合わせしたいですね」

願ったりだ。

「明日にでも早速！」

フィオレンティナは喜々として請け負ったのだった。

変わったのは環境ばかりではなく、エンデュミオンとの距離もまた、ほんの少しだけ変化していた。

それはゆるやかに、穏やかに、とても自然に。

エンデュミオンの物腰は初めから変わらず丁寧だけど、砕けた話し方をするようになったし、フィオレンティナに対する呼び方は「フィオナ姫」「姫」から「フィオナ」となり、二人で散策する時には手を繋ぐようになった。

今も、エンデュミオンがフィオレンティナに向かって手を差し伸べている。

「フィオナ、迎えに来たよ」

学校に通うようになると、エンデュミオンは時々こうやって帰りに時間を迎えに来る。

最初は王太子の登場に学内は騒然となった。王宮群の南東に位置するこの学校は十歳から十五歳以下の貴族の子女や一部の富裕層の子どもが通う。貴族と言ってもまだ社交界入りはしていない年齢なので、余程家格が高くなければ王族と間近で会う機会などない。それがいきなり現れれば、しかも見目麗しい王太子とくれば、大騒ぎになるのも当然だった。他国の王女であるフィオレンティナも注目を浴びたが、比ではない。特に女の子は凜とした美少年ぶりに頬を染め、熱い眼差しを送った。間近で見た嬉しさのあまりか、涙を流す者もいた。教師陣ですら慌てふためいていた。

そんな中、周囲の喧騒など素知らぬふりでフィオレンティまで辿り着くと、今と同じように、迎えに来たよと甘く微笑んだのだ。周囲からは悲喜入り混じる悲鳴が上がり、卒倒する者まで出た程だった。すごい人気振りだと舌を巻く一方で、その甘さにフィオレンティナもしっかり当てられて、顔を熱くしながら手を繋ぎ、また悲鳴を誘ったのだった。そんな騒ぎも同じ場面を幾度か繰り返せば落ち着きを見せ、今では温かい目で遠巻きに見守らるようになった。

差し出されたエンデュミオンの手に吸い寄せられ、手を重ねる。すると包み込むように柔らかく握られる。

フィオレンティナはこの瞬間がとても好きだ。

触れ合っているのは手だけなのに、体ごと護られるような頼もし

さと、伝わる温もりに愛しさが湧き上がってくる。きゅつと握り返せば、離さないと言わんばかりに握りしめられる。たったそれだけで胸の中が幸福感で満たされるのだ。満ち足りた思いで見上げると、黒い瞳が視線を受け止め、自然と微笑み合って歩き始める。

ほう、と漏らされる周囲の羨望と憧憬の溜息。最早放課後の名物となっていることに気付いていないのは常人だけであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3666t/>

ルグスオンジュの陥落

2011年8月19日20時03分発行